

奥の細道吟行上

加藤楸邨

歴史と文学の旅

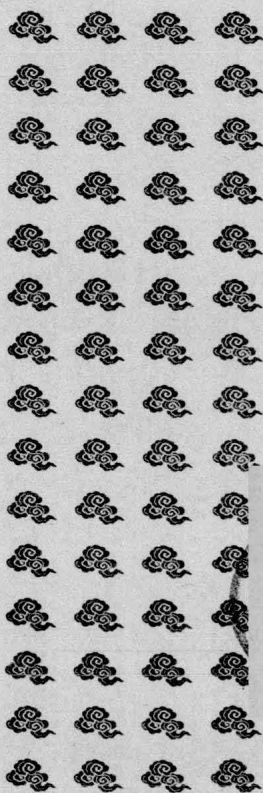
● 平凡社



歴史と文学の旅

● 平凡社

吟行・上



加藤楸邨（かとうしゅうそん）

1885年（明治38年）東京生まれ。

東京文理大國文科卒業。

青山学院女子短大教授。

「寒雷」主宰，俳文学会，現代俳句協会員。

句集「寒雷」「まぼろしの鹿」句文集「西域

俳句紀行一死の塔」他。

歴史と文学の旅 奥の細道吟行・上

昭和49年 2月20日 初版第1刷発行

著 者 加藤楸邨

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町4番地1

郵便番号 102 振替 東京 29639

電話東京 (03) - 265 - 0451

印 刷 株式会社東京印書館

フォト印刷株式会社

製 本 和田製本工業株式会社

© 加藤楸邨 1974

不良本のお取替えは直接小社サービス課まで
(送料は小社負担)



芭蕉が「そろそろ種に物につまぐ」取るもの手につかず、夏の稲道の旅に出たのは旧三月末であった



春日部を過ぎて利根川を渡る。道にも畑にも川にも空にも関東の春が満ちている

此为试读, 需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com





日光。琅玕色の中禅寺湖に男体山がひっそりと影をうつす。青葉、若葉に初夏の陽光が降りそそぐ

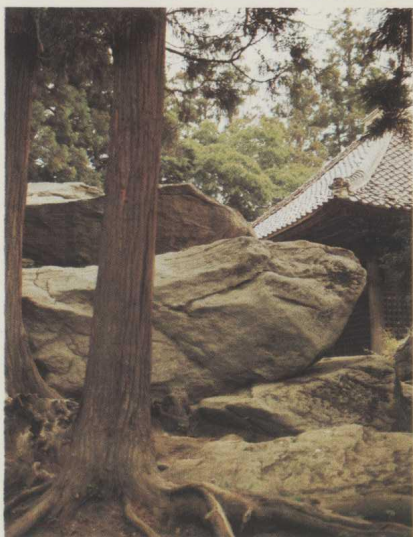


雲岩寺。参禅の師、仏頂を慕って芭蕉は山居の跡へ杖を曳いた
白河の関。念珠、勿来、白河の東国三関の一で歌枕に著名である





白河の関を越えてから、芭蕉は須賀川で歌仙を巻き、安積では花かつみを尋ね歩く旅を楽しんだ
源融と虎女の恋をからめた信夫の里の文知摺石 鬼女伝説の黒塚は、老杉の根元に陰陰とある

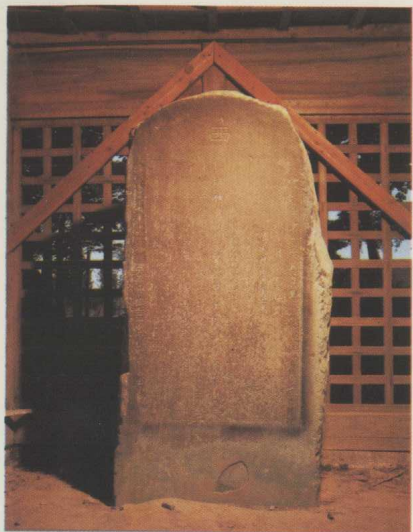




福島から医王寺を過ぎ、飯塚へと細道は続いた。ときに持病さえ起こる。心細い旅でもあった。







碑の正面上に「西」とあり各地への里数をしるす 塩釜街道の傍に立つ壺の碑（多賀城碑）の覆堂
末の松山。沖の石、野田の玉川などと昔を偲んだ夜は、目盲法師の琵琶の哀音を聞くのであった





青葉城石垣。あやめふく日、仙台入りをした芭蕉は、一日宮城野に遊び、萩茂りあう秋を思った



「扶桑第一の好風にして、凡洞庭・西湖を恥ず……」とただただ絶讃した松島



松島湾を見下ろす一森山頂上には陸奥一ノ宮、塩釜明神がある
伊達家の菩提寺で、杉の巨木が昼なお暗く茂る松島瑞巖寺境内





みちのく山にこがね花咲くと詠まれた金華山は東奥三霊場の一つで、明治まで女人禁制であった
石巻からは真野の萱原を通り平泉へと心ざした 「数百の廻船入江につどひ」と描かれた石巻港

